コロス

第178号
令和6年8月1日
発行常民文化研究会
〒254 平塚市東八幡
-0016 4-15-6西海方
郵便振込口座
00280-9-12790

「コロス」とはギリシャ語Xoposで英語Chorusコーラスに当たります。
ギリシャ悲劇では十数人の合唱団として、演劇の進行を説明し、時には民衆心を代弁する重要な役割を果すものです。私達の心を反映する小さな場としてこの会詩を「コロス」と名付けました。

入会受付けについて

入会は随時受付し希望者は、事務所に葉書にて、住所、氏名、電話番号を連絡の上、本会の郵便振込口座（〇〇二八〇―九―一二七九〇）一年会費一〇〇〇円を振込み下さい。

石鎚講中参拝紀念録に世相を読む(3)

―安芸国忠海二窓西山講中の二百六十年に寄せて―

西海（にしがい）　賢二

石鎚山信仰は、愛媛県西条市小松町にある伊予の高嶺と称される石鎚山に対する信仰をいう。石鎚山（一九八二メートル）四国のみではなく日本の七霊山の一つとして、西日本の最高峰の山である。頂上にあたる天狗嶽（一九八二メートル）・弥山（一九七四メートル）付近にはほとんど草木もなく山というより巨岩のような大厳峰で異彩を放っている。山頂直下の鎖を使ってよじ登る鎖禅定が壮観であり、とくに三の鎖は神体として崇められている。

石鎚山の歴史は古代にさかのぼり、平安時代の『日本霊異記』には伊予の国にある石鎚山は、浄行の人でなければ登れない神山と記され、平安時代後期の歌謡集『梁人秘抄』には大峯・葛城と並ぶ聖の住む所と記され、さらに空海や光定の入山修行も紹介されている。

中世から近世にかけては四国八十八カ所の札所にもなっている前神寺（六十四番）・横峰寺（六十番）の両寺ともに別当寺を勤めた経緯があり、信仰拡大するために精力的に活動し、江戸時代の中期（宝暦・天明期）以降は瀬戸内海の漁村を中心にして多くの石鎚講が蔟生し、在俗の者が多く登山するようになった。現在の年一度の（七月一日から十日まで）の大祭お山市は盛況をきわめ、十万人近い信者がつめかけている。なを、現在も七月一日のみは女人禁制がまもられており、修験道の霊場としての性格を色濃く残している。第二次世界大戦後は近世以来の石鎚講を母体にした石鎚神社・石鎚本教・前神寺・横峰寺・極楽寺を中心にした信仰集団らが瀬戸内沿岸を中心として活動している。

以下に令和6年に石鎚講を結成して二百六十年目になる。広島県竹原市二窓の西山講の講元（講頭）さんより、今年（令和六年）三月二日に私の手元に二百六十年間の講元帳簿が預けられ活字化できないかとの依頼を受けたものの、講員名簿だけでなく時代時代の世相を具に記録されており、宝暦十四（明和元年・1754）からの歴代天皇の紹介、江戸時代を通じての徳川の歴代将軍、大老・老中の執政についての紹介、さらに時代、時代の天変地異、村方騒動、幕府転覆に関わる記述、幕末維新期などの大砲設置、天候、異国船の入港、その江戸幕府の内覧、事件の表立った人物の世相が赤裸々に紹介されており、簡単には紹介できないことが判明したので何回かに分割して紹介することとした。今回がその三回目となる。西山講中と類似したほぼ同世代の講元帳簿が広島県内、岡山県内にも確認されており、誌面の関係もあって一括の紹介が叶わないので許容範囲で紹介していきたいと考えている。

「紀元二千五百二十一年
文久元　辛酉歳
第百弐十代
孝明天皇御宇
十四代将軍徳川家茂
記事
二月十九日改元
五月老士江戸高輪霊禪寺
ニ於テ英人ヲ傷ク
依之英人兵ヲ横浜ニ置キ自衛セリ
参詣人　十人
先達　二代目紋三郎
「印」
紀元二千五百二十二年
文久二壬戌
第百二十代
孝明天皇　御宇
十四代将軍徳川家茂
記事
青蓮院宮以下ノ幽弊ヲ解キ井伊訪討伐セラル
麻疹病流行
三月處士安藤信正ヲ坂下門二要撃ス之ヲ坂下門ノ変ト称ス
毛利齋親親書ヲ幕府ニ呈シ天下ノ形勢ヲ論ス
幕府軍艦ヲ造ル
十一月勅使三條實美等東下ス
参勤交代ヲ緩ム
参詣者　十七人
先達　二代目紋三郎
「印」
紀元二千五百二十三年
文久三癸亥歳
第百二十代
孝明天皇御宇
十四代将軍徳川家茂
記事
三月文久銭ヲ鑄ル
五月長門ノ人米艦ヲ赤間関
二砲撃ス
高山定之尊氏ノ木像ヲ桀ス
三條實美等脱走スヲ七卿落シテ天下注目セリ
参詣者　四十九人
先達　二代目紋三郎
「印」
紀元二千五百二十四年
元治元　甲子歳
第百二十代
孝明天皇御宇
十四代将軍徳川家茂
記事
二月二十日　改元